

感染症発生動向調査情報による徳島県の患者発生状況（平成28年）

徳島県立保健製薬環境センター

嶋田 啓司・片山 幸*

Infectious diseases surveillance reports in Tokushima Prefecture in 2016

Keiji SHIMADA, Miyuki KATAYAMA

Tokushima Prefectural Public Health, Pharmaceutical and Environmental Sciences Center

I はじめに

当センターでは、「徳島県感染症発生動向調査実施要綱」に基づく徳島県感染症情報センターとして、徳島県における感染症の発生情報の収集、解析を行っている。解析した情報は週報や月報として医療機関や県民等に還元し、感染症の拡大防止や公衆衛生の向上に努めている。

今回、平成28年1月から12月までの患者発生状況についてまとめたので報告する。

II 方法

感染症発生動向調査における患者届出対象疾患は、「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」により指定されている一類から五類感染症、新型インフルエンザ等感染症の87疾患（全数把握対象疾患）、指定届出機関から届出を受ける25疾患（定点把握対象疾患）とした。

感染症の発生情報は、定点把握対象疾患のうち、内科、小児科、眼科及び基幹定点週報分は、月曜日から日曜日までの1週単位で、性感染症定点及び基幹定点月報分は月単位で集計解析を行った。

III 結果及び考察

1 全数把握対象疾患の届出状況（表1）

(1) 一類感染症

一類感染症の届出はなかった。

(2) 二類感染症

① 結核

結核は156件届出られた。年間届出数は、平成25年以降

約150件前後のほぼ横ばいで推移している。月別の届出数では、1月と8月が7件とやや少なかったものの、その他の月は12～18件で推移し、季節的な特徴は見られなかった。症状別では、「患者」が134件と最も多く、「疑似症患者」は1件、「無症状病原体保有者」は21件であった。届出者を年齢別にみると、60歳未満では各年齢層ともほぼ10件以下の届出数であったが、60歳を越え年齢が高くなるにつれ大きく増加し、60歳以上が121件と全体の約78%を占めた。性別では、男性77件、女性79件とほぼ同数届出られた。

年齢別に症状を比較した場合、60歳を境として大きく異なった。すなわち60歳以上では「患者」及び「疑似症患者」が111件（91.7%）と大部分を占めたのに対し、60歳未満では「患者」が24件（68.6%）、「無症状病原体保有者」が11件（31.4%）と若年層ほど「無症状病原体保有者」の割合が高かった。

また届出者の職業別では、医療・介護などの施設関係者や学生、接客業など人と接する機会の多い環境にある者も見られたことより、感染拡大防止のため施設関係者等に対する感染予防啓発、施設内感染対策の徹底が不可欠と考えられた。

(3) 三類感染症

① 腸管出血性大腸菌感染症

腸管出血性大腸菌感染症は、前年（10件）より多い17件が届出られた。県内保育所にて発生した集団感染事例や家族内感染事例の影響によると考えられる。過去の年間届出数をみると、平成23年以前においては毎年13～27件が報告されていたが、厚生労働省による生食用食肉の規格基準改正（平成23年10月から）と生食用牛生レバーの提供が禁止（平成24年7月から）されて以降減少し、平成24～27年について

*現 環境管理課

は年間5～11件と少なく推移した。

月別の届出数推移は全例6～9月に届出られ、患者発生は夏から秋に集中した。年齢別では10歳未満から30歳代まで報告され、若年層から多く報告された。診断の類型では「患者」が10件、「無症状病原体保有者」7件と「患者」の割合が多く、血清型別では本疾患の多くを占めるO157やO26の他にO113などの血清型も報告された。

報告例の感染経路や感染源は、潜伏期間が2～14日と比較的長いこともあり原因の特定には至らなかったが、全て国内にて感染したと推定された。

(4) 四類感染症

① A型肝炎

A型肝炎は、3件届出られた。30～60歳代の男性2名、女性1名で、本疾患は潜伏期間が2～7週間と長いため感染経路の特定には至らなかったが、県内で感染したと推定された。

② 重症熱性血小板減少症候群

重症熱性血小板減少症候群は、8件届出られた。届出月は4～9月と、マダニの活動時期にあたる春から秋に集中し、患者の年齢及び性別は60歳以上の男女各4名ずつ、感染経路は県内にて畑作業中などの野外活動時にマダニ等に刺咬され感染したと推定された。徳島県では本疾患をはじめ、つつが虫病、日本紅斑熱など、原因微生物を保有するダニや昆虫の刺咬による感染症が毎年のように報告されている。重症化例も見られることより、登山、森林作業、農作業など野外作業機会の多い中高年者を中心に、ダニ・昆虫媒介性疾患に対する予防対策の啓発が重要と考えられた。

③ つつが虫病

つつが虫病は、2件届出られた。患者は60歳代の女性と80歳代の男性で、報告月は患者発生報告が多いとされる冬から春先にあたる11月と12月、県内にて感染したと推定された。

④ デング熱

デング熱は、8月に1件届出られた。患者は20歳代の女性でフィリピンにて滞在中、媒介蚊に刺咬されたことにより感染したと推定されている。過去5年間では、平成24年、平成26年と1年おきに1件ずつ報告され、いずれも海外旅行中に感染したと推定されている。

デングウイルスを媒介するヒトスジシマカは、わが国にも広く分布し、夏期を中心に活発に活動する。平成26年には、約70年ぶりに東京都を中心として国内流行が発生した。ダニを含め昆虫媒介性疾患は、刺咬されないことが第一の感染予防策であり、広く啓発していきたい。

⑤ 日本紅斑熱

日本紅斑熱は、6件届出られた。過去5年間での年間届出数推移は1～13件と、年毎による差が大きい。届出月は4～10月とマダニの活動時期に一致する春から秋に集中し、患者は60歳以上の男女各3名ずつであり、レジャーや農作業等の野外作業においてダニに刺咬されたと推定されるなど、重症熱性血小板減少症候群と同様の傾向が見られた。

⑥ ライム病

ライム病は、5月に30歳代の女性から1件届出られた。日本への入国前にスウェーデンにてマダニ等に刺咬され感染したと推定された。

⑦ レジオネラ症

レジオネラ症は、過去5年間毎年1～3件の報告数で推移していたが、前年は5件、本年は11件と2年続けて増加した。性別は男性8名、女性3名と男性が多く、全員50歳以上の中老年層であった。病型は全例「肺炎型」で、感染地域は県内、感染経路は多くが水系感染と推定されている。

(5) 五類感染症

① アメーバ赤痢

アメーバ赤痢は4件届出られた。性別は全員男性、年齢は40～60歳代であった。感染経路は、性的接触が3例、経口感染が1例、いずれも国内にて感染したと推定された。

② ウイルス性肝炎(E型、A型を除く)

ウイルス性肝炎は、3月に1件届出られた。10歳代の男性で、病型は「B型肝炎」であった。感染経路は性的接触で、国内にて感染したと推定された。

③ カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症

カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症は5件届出られた。年齢は30歳代から80歳代と幅広く、性別は男性3名、女性2名であった。感染経路は手術部位や医療器具を介しての感染が3例、以前からの保菌が2例であり、国内にて感染したと推定された。

④ 急性脳炎

急性脳炎は3件届出られた。患者は、5歳未満の女性、20歳代男性、80歳代男性で、国内にて感染したと推定された。1例から「水痘帯状疱疹ウイルス」が検出されている。

⑤ 劇症型溶血性レンサ球菌感染症

劇症型溶血性レンサ球菌感染症は、6月に1件届出られた。50歳代の女性で、感染経路は創傷感染、国内にて感染したと推定された。

⑥ 後天性免疫不全症候群

後天性免疫不全症候群は、6件届出られた。過去5年間では毎年4～8件届出られている。年齢は10～50歳代、性別はすべて男性、病型は「患者」1件、「無症候性キャリア」5件

であった。推定感染経路は、不明1件を除き同性または異性間での性的接触であり、全例国内にて感染したと推定された。

現在、保健所等を中心に利用者の利便性に配慮した無料検査・相談体制が実施されている。本年、報告された6件のうち、2件は県内保健所で実施された無料検査にて診断、報告された。今後もハイリスク層や発生報告の多い20～40歳代を中心とした幅広い年齢層に対し、より積極的な普及啓発を推進し、HIV感染の早期発見による早期治療と感染拡大の抑制に努めることが重要と考えられた。

⑦ 侵襲性インフルエンザ菌感染症

侵襲性インフルエンザ菌感染症は、2件届出られた。患者は80歳の男女各1名ずつで、国内にて感染したと推定された。

⑧ 侵襲性肺炎球菌感染症

侵襲性肺炎球菌感染症は、4件届出られた。年齢は40～60歳の男性1名、女性3名で、国内にて感染したと推定された。

表1 全数把握対象疾患の届出数

類型	疾病名	平成28年	前年
二類	結核	156	149
三類	腸管出血性大腸菌感染症	17	10
四類	A型肝炎	3	1
	重症熱性血小板減少症候群	8	3
	つつが虫病	2	1
	デング熱	1	
	日本紅斑熱	6	6
	ライム病	1	
	レジオネラ症	11	5
五類	アメーバ赤痢	4	5
	ウイルス性肝炎（E型、A型を除く）	1	1
	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	5	4
	急性脳炎	3	2
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	1	1
	後天性免疫不全症候群	6	8
	侵襲性インフルエンザ菌感染症	2	1
	侵襲性肺炎球菌感染症	4	7
	梅毒	11	2
	破傷風	2	

⑨ 梅毒

梅毒は、過去5年間において毎年1～3件の届出数であったが、本年は11件と急増した。年齢は70歳以上の高齢者も3例見られたが、20～40歳代が8例と若年層に多く、不明3

例を除き多くが国内で感染したと推定されている。現在、我が国では若年層を中心に梅毒患者の増加が大きな問題となっている。HIVと同様に20～40歳代を中心とした幅広い年齢層に対し、感染者とそのパートナーに対し、検診の受診を含めたより積極的な感染予防啓発の推進が重要と考えられた。

⑩ 破傷風

破傷風は、2件届出られた。年齢は70～80歳代の男女各1名ずつ、感染経路は創傷感染、国内にて感染したと推定された。

2 定点把握対象疾患（週報）の動向（表2）

（1）内科，小児科定点

① インフルエンザ（鳥インフルエンザ及び新型インフルエンザ等感染症を除く）

年間報告数は9,808件であり、前年（8,574件）よりやや増加した。本年の流行前期は、前年より約1ヵ月遅い第2週に流行期入りした後、7週連続で増加しピーク（32.2件/定点）を迎えた。ピークの高さは前年（47.8件/定点）と比べ低かったものの、報告数が注意報レベル（10件/定点）を超えた期間（第4～13週）は、前年（第52～6週）と比べ長かった。後期流行については、例年とほぼ同じ第50週に流行開始の目安とされる1.0件/定点を超え、流行シーズンを迎えた。

年齢層別報告数では、4歳以下18.5%、5～9歳33.6%、10～14歳18.2%、15～19歳4.0%、20歳以上25.7%であり、前年と比較して5～9歳の割合が高く、20歳以上の割合が低かった。

（2）小児科定点

① RSウイルス感染症

年間報告数は1,976件であり、前年（1,679件）よりやや増加した。前期流行は、前年の後期流行を継続したまま、第9週まで報告数の高い状態が続いた。後期流行は、前シーズン同様に例年より約2ヶ月早い8月下旬より報告数が増加し始め、第40週から第47週までの長い期間、報告数の高い状態が続いた。はっきりしたピーク（第43週：5.0件/定点）は見られなかったが、流行期間が長く、全国平均を上回る報告数のまま越年した。

年齢層別報告数では、0歳36.0%、1歳32.8%、2歳16.9%、3歳8.0%、4歳以上6.3%であり、前年と同様に2歳以下の乳幼児の割合が大半（約86%）を占めた。

② 咽頭結膜熱

年間報告数は448件であり、前年（453件）とほぼ同数報告された。本疾患の流行パターンは、4月ごろから増加しはじめ7～8月にピークを示すことが多い。本年は例年と異なり、3月上旬に県内一部の地域での地域流行や、5～7月頃にやや

増加した時期はあったものの、夏から秋にかけてはほとんど報告されず、晩秋である第45週より増加傾向を示し越年した。

年齢層別報告数では、1歳以下34.4%、2～3歳33.3%、4～5歳22.8%、6～7歳5.6%、8歳以上3.9%であり、5歳以下が約91%を占めた。

③ A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

年間報告数は1,347件であり、前年(1,418件)とほぼ同数報告された。本疾患は、冬期および春から初夏にかけて報告数が増加するとされる。本年は、年当初から初夏にあたる第28週頃までやや高く推移したものの、年間を通して報告数に大きな増減は見られず、2年続けて同様の流行パターンを示した。

年齢層別報告数は、0～1歳3.7%、2～3歳13.3%、4～5歳35.8%、6～7歳24.7%、8～9歳12.2%、10～14歳6.9%、15歳以上3.4%と、学童期小児の割合が高かった。

④ 感染性胃腸炎

年間報告数は9,708件であり、前年(7,411件)から大きく増加(約30%)した。本疾患は、初冬から報告数が増加し始め、12～1月頃に一度ピークが見られた後、春にもう一つなだらかなピークを示すことが多い。本年の前期流行も、前年の10月頃(第40週)より報告数が増加し始め、第46週にシーズン最初のピーク(9.2件/定点)を示した。そして第2週より再び増加傾向となり第5週に2回目のピーク(13.0件/定点)をつけた後は緩やかに減少した。後期流行は11月初旬(第45週)から報告数が急増し、第50週にピーク(17.7件/定点)が見られた後、高い状態のまま越年した。

年齢層別報告数は、0～1歳25.3%、2～3歳23.4%、4～5歳17.9%、6～7歳9.9%、8～9歳6.3%、10～14歳8.9%、15歳以上8.3%と5歳以下の乳幼児が全体の約67%を占めた。

⑤ 水痘

年間報告数は300件と、4年続けて減少した。過去5年間で最も多かった平成24年(1,765件)に比べ約1/6の報告数となった。本疾患は年間を通して発生するが、主に冬から春にかけて流行し、夏から初秋は減少するとされる。本年も年間を通して報告され、5月下旬に県内一部の地域において地域流行などみられたものの大きなピークは見られず、年間を通じて低い報告数(1.0件/定点以下)のまま推移した。

年齢層別報告数では、0～1歳15.0%、2～3歳15.0%、4～5歳36.3%、6～7歳20.7%、8歳以上13.0%と5歳以下の報告が全体の約66%を占めた。

⑥ 手足口病

年間報告数は332件と、大きな流行が見られた前年(4,191件)と比べ1割以下に減少した。過去5年間では、平成25

年(1,574件)、27年と1年おきに流行が見られている。

本疾患は夏に流行する代表的な感染症であり、例年7～8月にピークを迎える。本年は、夏期を中心に報告は見られたものの、年間を通して低い報告数(1.0件/定点以下)で推移し、ピークも見られなかった。

年齢層別報告数では、0～1歳50.3%、2～3歳34.6%、4～5歳10.2%、6～7歳1.8%、8歳以上3.1%であり、5歳以下からの報告が全体の約95%を占めていた。

⑦ 伝染性紅斑

年間報告数は343件であり、前年(197件)の約1.7倍に増加した。過去5年間の報告数の推移では、19～448件と年毎により報告数の変化が大きい。

本年は年間を通し、多少の増減を繰り返しながら0.78件/定点以下の低値で推移した。ピークや季節的な変動も示さず、前年認められた地域流行も見られなかった。

年齢層別報告数では、0～1歳4.4%、2～3歳19.0%、4～5歳27.7%、6～7歳26.5%、8～9歳11.4%、10歳以上11.0%と、4～7歳の幼少児での割合が高かった。

⑧ 突発性発しん

年間報告数は798件と、平成24年(1,037件)以降、毎年少しずつ減少している。

一般に本疾患は、季節性も年次推移も認められず、年間を通じてほぼ一定の範囲内をスパイク状の増減を繰り返しながら推移するとされる。本年もピークは示さず、大きな季節的な変動も見られないまま、報告数は一定の範囲内(0.4～1.2件/定点)で推移した。

年齢別報告数では、0～1歳82.3%、2～3歳13.3%、4～5歳4.1%、6歳以上0.3%と、1歳以下が最も多く報告され、3歳以下で大半(約96%)を占めた。

⑨ 百日咳

年間報告数は30件であり、過去5年間、毎年10～30件で推移している。本年も季節的な変化は見られず、報告数は一定の範囲内(0～0.13件/定点)で推移した。

年齢層別報告数では、0～1歳23.3%、2～3歳3.3%、4～5歳13.3%、6～7歳6.7%、8～9歳16.7%、10～14歳23.3%、20歳以上13.3%であった。報告数が少ないため単純に比較することはできないが、前年と比べ10歳以上の割合が増加していた。

⑩ ヘルパンギーナ

年間報告数は876件であり、前年(428件)から大きく増加した。本疾患は、手足口病とともに主に乳幼児の間で流行する夏期の代表的な感染症である。本年は、6月初旬(第22

表2 内科, 小児科, 眼科定点報告対象疾患の週別報告数

週	期間	インフルエンザ	RSウイルス感染症	咽頭結膜熱	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	感染性胃腸炎	水痘	手足口病	伝染性紅斑	突発性発しん	百日咳	ヘルパンギーナ	流行性耳下腺炎	急性出血性結膜炎	流行性角結膜炎
1	1/4~	36	67	7	19	212	19	2	8	12		2	10		3
2	1/11~	58	67	13	30	272	6		12	13			7		2
3	1/18~	238	65	9	37	294	11		15	11	1		2		
4	1/25~	390	53	11	29	273	1		3	15			11		
5	2/1~	629	53	5	42	299	2		5	11			9		
6	2/8~	1,012	68	15	40	236	7		3	16			5		1
7	2/15~	1,132	51	18	30	186	9	1	5	8			10		
8	2/22~	1,159	34	20	34	184	7		3	15			8		
9	2/29~	1,224	21	18	26	216	5		7	9			12		
10	3/7~	1,058	10	21	27	198	5	1	6	12			6		
11	3/14~	984	16	15	31	191	7		7	13			4		2
12	3/21~	585	16	13	24	158	2		7	18	1		7	1	1
13	3/28~	412	8	10	27	201	5		6	11	1		15		1
14	4/4~	237	4	7	19	148	3		6	11		1	13		
15	4/11~	109	7	10	14	110	1		8	18			16		
16	4/18~	69	11	10	30	139			10	13			18		
17	4/25~	28	8	13	24	136	6	1	6	19			21		1
18	5/2~	15		11	20	102	4	1	6	14			13		
19	5/9~	9	1	13	26	115	4		12	22		1	26		
20	5/16~	9	1	9	30	127	2	1	5	15	1	1	26		1
21	5/23~	13	2	11	38	116	11	1	6	20		8	16		
22	5/30~	3		19	36	94	9	1	11	17		16	23		2
23	6/6~			16	23	103	10	6	5	17	1	18	31		1
24	6/13~		2	8	31	131	5	8	9	25	2	62	18		
25	6/20~			6	39	139	12	4	4	22	1	92	26		
26	6/27~			15	29	113	5	6	6	14		147	28		1
27	7/4~	2		12	36	119	7	13	10	16	2	160	38		1
28	7/11~	5		11	18	124	4	6	7	18	1	125	37		1
29	7/18~	4		5	18	168	9	4	8	16		47	38		1
30	7/25~		3	10	15	179	10	6	6	16	2	40	34		1
31	8/1~		3	3	11	217	1	8	3	15		36	26		
32	8/8~		5		12	187	6	5	2	27	1	28	35		
33	8/15~		10	3	9	174	3	7	1	18	3	11	48		
34	8/22~		11	4	12	183	2	6	3	24	2	14	37		
35	8/29~		28	2	13	175	7	8	3	14	1	5	45		
36	9/5~	1	48	1	17	178	6	12	2	11		7	45		
37	9/12~	1	71	3	22	153	1	12	2	18	3	3	56		2
38	9/19~		51	4	11	122	6	9		18		8	51		
39	9/26~		58	2	16	111	4	22	5	15		5	55		
40	10/3~	1	101		18	110	3	23	7	16		8	67		
41	10/10~	1	109		21	109	1	14	2	15	2	4	34		
42	10/17~	1	78		28	118	5	12	6	13		4	59		
43	10/24~		116	2	15	121	2	17	9	16		5	43		
44	10/31~	6	115	1	24	128	6	22	4	14	2		28		
45	11/7~	4	103	3	28	215	4	17	9	13	1		38		1
46	11/14~	9	86	5	29	266	13	16	8	14		1	33		1
47	11/21~	36	112	8	30	290	7	20	11	14	1	5	22		
48	11/28~	29	74	4	36	347	7	10	11	13	1	3	47		1
49	12/5~	26	67	7	37	379	1	16	11	16		1	33		1
50	12/12~	46	52	9	40	407	6	7	18	9		2	27		1
51	12/19~	91	62	12	42	358	6	4	9	12		5	22		2
52	12/26~	136	48	14	34	277	15	3	5	16		1	20		1
合計		9,808	1,976	448	1,347	9,708	300	332	343	798	30	876	1,399	1	30

週頃)より報告数が増加し始め、6月中旬(第24週頃)より急増し、第27週にピーク(7.0件/定点)を示した。大きな流行となった平成25、26年と同様の流行パターンを示した。年齢層別報告数は、1歳以下35.3%、2~3歳38.6%、4~5歳20.0%、6~7歳4.2%、8歳以上1.9%であり、5歳以下の乳幼児が約94%を占めた。

⑪ 流行性耳下腺炎

年間報告数は1,399件であり、前年(179件)の約8倍と大きく増加し、平成23年以降6年ぶりの流行年となった。本疾患は年間を通して発生するが、晩冬から春にかけて多くなるとされる。本年は、3月下旬(第3週)より緩やかに増加し始め、増加傾向は10月まで続き、第40週にピーク(2.9件/定点)を示した。

年齢層別報告数では、1歳以下1.6%、2~3歳13.8%、4~5歳37.6%、6~7歳30.9%、8~9歳10.0%、10歳以上6.1%であり、4~7歳の幼児からの報告数が約7割を占めた。

(3) 眼科定点

① 急性出血性結膜炎

年間報告数は1件(30歳代)であった。過去5年間でも毎年0~1件で推移し、徳島県内での流行は見られていない。

② 流行性角結膜炎

年間報告数は30件であり、前年(23件)からやや増加したが、報告数は年間を通して低値で推移した。

年齢層別報告数では、10歳未満6.6%、20歳代10.0%、30歳代26.7%、40歳代20.0%、50歳代10.0%、60歳代以上26.6%と幅広い年齢層から報告され、年齢による特徴は見られなかった。

(4) 基幹定点

① 細菌性髄膜炎

年間報告数は2件(5歳未満)であり、病原体は2件ともB群溶血性レンサ球菌が検出されている。過去5年間においても、毎年1~3件で推移している。

② 無菌性髄膜炎

年間報告数は3件(20歳代~40歳代)であり、病原体は検出されていない。過去5年間では、毎年1~9件で推移している。

③ マイコプラズマ肺炎

年間報告数は57件であり、前年(43件)からやや増加した。過去5年間では、年間17~57件で推移している。本疾患は年間を通して発生するが、秋から冬にかけて多くなるとされる。本年は、季節的な特徴は見られず、年間を通して低値で推移した。

年齢層別報告数では、5歳未満21.0%、5~9歳45.6%、10

~14歳21.1%、15~19歳8.7%、20歳以上3.5%と、幅広い年齢層から報告されたものの、学童期を含む10歳未満からの報告数(約67%)が他の年齢層に比べ多かった。

④ クラミジア肺炎

年間報告数は1件(70歳代)であった。過去5年間では、平成25年に3件報告されている。

⑤ 感染性胃腸炎(ロタウイルス)

年間報告数は58件であり、2年続けてやや増加した。冬(第3週)から春先にかけて多く報告されたが夏期は報告されず、季節的な特徴が見られた。

年齢層別報告数では、5歳未満74.1%、5~9歳24.1%、10歳以上1.8%と、5歳未満の乳幼児からの報告が大半を占めた。

3 定点把握対象疾患(月報)の動向

(1) 基幹定点(表3)

薬剤耐性菌感染症の総報告数は291件であり、前年(352件)からやや減少した。過去5年間では平成22年(473件)以外は350~400件で推移し、大きな変化は見られていない。

表3 基幹定点(月報)報告対象疾患の月別報告数

	メチリン耐性 黄色ブドウ球菌感 染症	ペニシリン耐性 肺炎球菌 感染症	薬剤耐性緑膿菌 感染症
1月	31		
2月	22		
3月	21	1	
4月	18	2	
5月	28		
6月	22	1	
7月	23		
8月	18	3	1
9月	23		
10月	26		
11月	33		
12月	18		
合計	283	7	1
前年	321	14	4

① メチリン耐性黄色ブドウ球菌感染症

年間報告数は283件(男性176件、女性107件)であり、前年(321件)からやや減少した。過去5年間では、毎年320~350件で推移している。季節的な特徴は見られず、年間を通して報告された。

年齢別報告数は、10歳未満9.2%、10歳代1.4%、20歳代1.1%、30歳代1.4%、40歳代4.9%、50歳代7.1%、60歳代12.0%、70歳以上62.9%と、前年同様に60歳を超え年齢が高くなる

につれ大きく増加した。

② ペニシリン耐性肺炎球菌感染症

年間報告数は7件（男性4件、女性3件）と、前年（14件）の半数であった。過去5年間では、毎年10～30件で推移している。

年齢別報告数では、10歳未満42.9%、50歳代14.3%、60歳代14.3%、70歳以上28.6%と、10歳未満からの報告が最も多かった。

③ 薬剤耐性緑膿菌感染症

年間報告数は1件（男性、70歳以上）であった。過去5年では、毎年5件以内の届出数で推移している。

(2) 性感染症定点（表4）

性感染症の総報告数は710件と、前年（652件）からやや増加した。過去5年間では、平成25年以降緩やかに増加している。

表4 性感染症定点報告対象疾患の月別報告数

	性器クラミジア 感染症	性器ヘルペス 感染症	尖形 コンジローマ	淋菌 感染症
1月	26	23	5	3
2月	20	31	5	5
3月	23	21	7	5
4月	20	23	7	5
5月	19	22	10	5
6月	23	27	7	9
7月	24	22	4	3
8月	34	26	4	5
9月	29	25	8	7
10月	15	20	9	
11月	11	26	5	2
12月	28	34	15	3
合計	272	300	86	52
前年	251	291	58	52

① 性器クラミジア感染症

年間報告数は272件と前年（251件）よりやや増加し、季節的な特徴は見られず、年間を通じて報告された。男女別では男性201件（前年190件）、女性71件（前年61件）と男性、女性ともやや増加し、全体では男性（約74%）が多くを占めた。

年齢別報告数では、10歳代4.8%、20歳代41.9%、30歳代34.2%、40歳代14.7%、50歳代以上4.4%と、20～40歳代からの報告が多かった。

② 性器ヘルペスウイルス感染症

年間報告数は300件と、前年（291件）から横ばいのまま、

季節的な特徴も見られず、年間を通じて報告された。男女別では男性67件（前年59件）、女性233件（前年232件）と女性の報告数がやや増加し、女性の報告数はほぼ同数であった。また性感染症全体では男性が女性より多く報告されているが、本疾患は女性が約78%を占めるなど、女性の割合が他の疾患に比べ高かった。

年齢別報告数は、10歳代1.0%、20歳代20.7%、30歳代21.7%、40歳代20.0%、50歳代14.0%、60歳代10.0%、70歳代以上12.7%と、20～40歳代がやや高かったものの、幅広い年齢層から報告された。また、60歳以上の高齢者からの報告数が22.7%と他の性感染症と比較して多い傾向が見られたが、潜伏していたウイルスによる再発の可能性も考えられる。

③ 尖形コンジローマ

年間報告数は、平成24年以降、毎年50～60件で推移していたが、本年は86件（男性59件、女性27件）とやや増加した。男女別では性器クラミジアと同様に男性が多く、約69%を占めた。

年齢別報告数は、20歳代23.3%、30歳代29.1%、40歳代29.1%、50歳代14.0%、60歳以上4.7%と、他の年代に比べ20～40歳代からの報告が多く、全体の約82%を占めた。

④ 淋菌感染症

年間報告数は、前年と同じ52件であった。男女別では、男性48件、女性4件と性器クラミジア、尖形コンジローマと同じく男性からの報告が多く、約92%を占めた。

年齢別報告数は10歳代1.9%、20歳代34.6%、30歳代40.4%、40歳代17.3%、50歳代3.8%、60歳代1.9%であった。他の性感染症と同様に、20～40歳代の割合が高く、全体の約92%を占めた。

IV まとめ

平成28年の感染症発生動向調査に基づく患者発生状況について動向をまとめた。

全数把握対象疾患では、「結核」が最も多く全体の約2/3を占めた。年間報告数は、平成25年以降ほぼ横ばいで推移し、年齢別では60歳以上の高齢者の割合が高かった。年齢別に症状を比較した場合、60歳以上では9割以上が「患者」であったのに対し、60歳未満では「無症状病原体保有者」が3割以上を見られた。また届出者の職業別において、医療・介護などの施設関係者や学生、接客業等、人と接する機会の多い者も見られたことより、施設関係者に対する感染予防、施設内感染対策の徹底が重要と考えられた。

「腸管出血性大腸菌感染症」は、県内保育所にて発生した集団感染事例や家族内感染事例の影響により、前年の1.7倍

に増加した。感染拡大を防ぐため、手洗い・消毒の徹底など予防啓発をしっかりと行っていきたい。

「重症熱性血小板減少症候群」や「日本紅斑熱」などダニや昆虫の刺咬による感染症が、野外作業機会の多い中高年者を中心に多く報告され、海外滞在中に感染したと推定される「デング熱」や「ライム病」も報告された。ダニ・昆虫媒介性疾患に対する正しい知識とともに、海外旅行者に対し予防対策の啓発も重要と考えられた。

近年、全国的に「梅毒」の報告が増加傾向にあり、徳島県においても前年から大きく増加した。「後天性免疫不全症候群」と共に、20～40歳代を中心とした幅広い年齢層に対し、感染者とそのパートナーに対しより積極的な感染予防啓発の推進が重要と考えられた。

定点把握対象疾患（週報）では、冬から春先にかけて「インフルエンザ」、「感染性胃腸炎」が流行した。夏風邪の代表とされ、前年大流行した「手足口病」は前年の約1/10に減少したが、「ヘルパンギーナ」は2年ぶりの流行年となった。「RSウイルス感染症」は、例年より流行開始時期も早く4年続け

て流行が見られた。また「流行性耳下腺炎」が平成23年以降6年ぶりに流行し、「咽頭結膜熱」、「水痘」の地域流行も見られた。

眼科定点報告疾患、基幹定点報告疾患については、前年と傾向は変わらず年間を通じて報告数は低値で推移したが、ロタウイルスによる感染性胃腸炎は、春先から初夏及び初冬に報告が多く、季節的な特徴が見られた。

定点把握対象疾患（月報）の基幹定点報告疾患である薬剤耐性菌感染症については、総報告数に大きな変化は見られず「メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症」が大半を占めた。また、性感染症定点報告疾患についても総報告数は前年と同数であり、男女別報告数も前年と同様に男性からの報告が多かった。報告数の多い20～30歳代の男性を中心に引き続き啓発を行うとともに、10歳代からの若年者に対する予防教育も重要と思われた。

今後も引き続きデータの集積を行い感染症の発生動向に注意していくとともに、迅速かつ適切な情報提供を行っていききたい。